日本人と Ambition

いま、車体に大きな字で AMBITIOUS　JAPAN と書かれた新幹線が走っています。

久しぶりの、心をはずませてくれる wonderful な光景でした。

私は「Boy ’ s　be　ambitious.」で育ってきた世代ですが、現代ではこういう言葉は死語になったと思ってきておりましたので、この卓抜なアイデアには元気づけられました。

最近、よく「結果を出せた」とか「結果を出したい」という発言を耳にします。しかし、私たちは、そうではなくて、結果は自ずと伴ってくるもので、肝心なことは　ambitious　であることであると教えられてきました。ただ　ambition　のレベルは確かに問題です。

ヨハン・セバスチャン・バッハは、すべての楽譜にその最後に S・D・G（Soli　Deo Gloria.）神の栄光）と記しているといわれます。すべての作曲に全霊をこめる窮極の ambition　でありましょう。

マックス・ウェーバーはおおづかみにいいまして、このような宗教的精神が、西欧近代創出の起動力になったと説明しました。

日本の場合、新渡戸稲造先生が 100 年と少し前にアメリカで「BUSHIDO,The　Soul　of Japan」の書物を著して、日本人の力量と品格の源泉に武士道があることを明らかにしました。日本人を真に　ambitious　であらしめるための貴重な指針を提供しました。

しかし、現代日本において武士道が普遍的理念となることは難しいことでしょうし、とすればいかなる信念で世界に伍して行くのか。日本人は理想や構想力の大きさによってではなく、素朴な勤勉によって意外に大事な事業を行っているということがあるように思えます。

日本は世界トップレベルの緑の国、森林の国になっていますが、これは戦中、そしてとくに戦後、里山に農民が一生懸命植林をしてきた賜物です。

木は少なくとも樹齢 100 年～200 年でなければ良い材木になりません。杉は 700～800 年、檜は 1000 年生存し、さらに材木になってそれと同じ寿命があります。つまり木は 1000～2000 年の生命力をもっているのです。ですから古代ローマにおいても、「植樹するのは、子孫のためだが、神々のためだ」といわれていたそうです。たしかに子孫のためといっても、結果が出せたりするものではなく、茫漠たる未来への期待だけ、もう神々のためというほかないものでしょう。日本の農民ははからずも最良の　ambition　を有していたことになるのではないでしょうか。

本日ご参会の官庁の方々は日頃世のため、人のためをモットーに精励されておられます。企業の方々も、単に目先の結果を求めるのではなく真に社会に有用なものは何かを念頭において励んでおられます。

私たちはこのように秀れて　ambitious　である皆様方に囲まれて今年一年を過ごさせていただくわけで大変恵まれていることを痛感し感謝に耐えません。

今年もどうか御指導の程お願い申し上げます。本日はまことにありがとうございました。

（2004 年 1 月「社団法人　くらしのリサーチセンター」賀詞交歓会あいさつ）